

霊宝館だより



大滝（解説は12頁）

霊宝館だより 第84号

平成19年7月20日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

（財）高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話 0736-56-2029

<http://www.reihokan.or.jp>

第28回大宝藏展

「信仰マンダラの世界 高野山－神仏への祈り」

2007年7月14日（土）～9月9日（日）

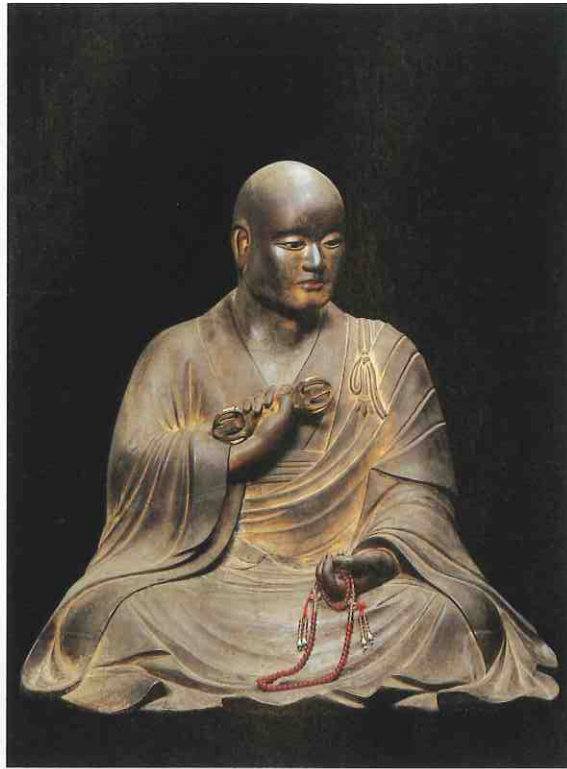
第28回大宝蔵展

「信仰マンダラの世界 高野山―神仏への祈り―」

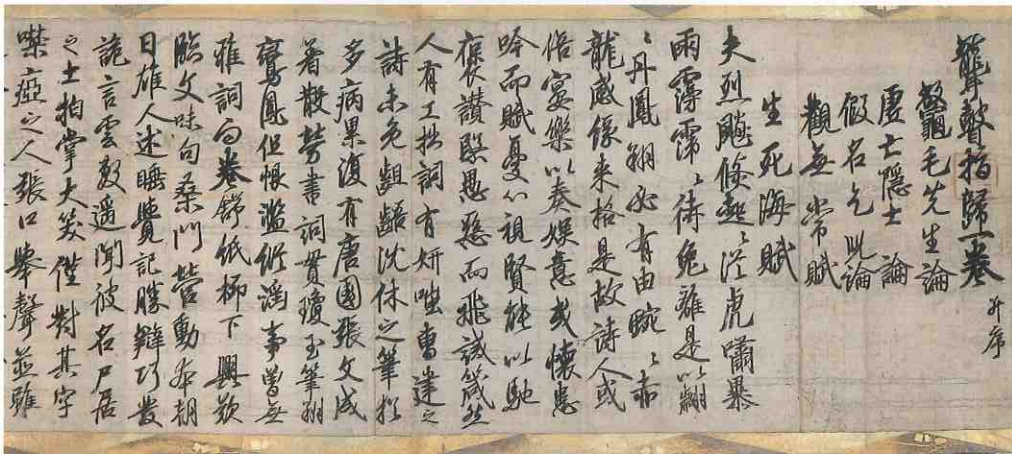
期間 7月14日(土) ～ 9月9日(日)



全期 国宝 八大童子立像のうち制多伽童子立像



全期 弘法大師坐像(万日大師)



国宝 聾瞽指歸 前期：上巻 後期：下巻

弘仁七年(八一六)に宗祖弘法大師空海によって高野山が開かれて以来、約一二〇〇年の歴史をもつ。

高野山の歴史は、宗祖大師の開創目的であった密教修禪の根本寺院という性格を有しながら、弘法大師信仰を中心にしたさまざまな宗教宗派の信仰を受け信仰霊場として人々の憧れの地として、成長してきた。まさに、そこには神仏への祈りをささげた人々の信仰マンダラの世界を垣間見ることが出来る。

この度の大宝蔵展では、霊場高野山に伝わる神仏への祈りを込めた霊宝の数々を展示公開する。



前期 重文 両界曼荼羅図(血曼荼羅)

主な出陳品

※展示期間表示 全…全期間、前期…7月14日から8月20日頃まで。
後期…8月20日頃から終了まで。

(絵画)

- 前期 重文 両界曼荼羅図(血曼荼羅) 平安時代 金剛峯寺
- 前期 国宝 善女竜王像 定智筆 平安時代 金剛峯寺



多聞天立像

広目天立像

増長天立像

持国天立像

全期 重文 四天王立像 作 快慶

(書跡)

- 全期 重文 崔子玉座右銘断簡 平安時代 宝亀院
- 全期 国宝 後白河法皇御手印起請文 鎌倉時代 金剛峯寺
- 前後 国宝 鞞髻指帰上卷 前期・下卷 平安時代 金剛峯寺
- 全期 重文 紺紙金泥一切経(荒川経)のうち 平安時代 金剛峯寺
- 全期 重文 町石建立供養願文 鎌倉時代 金剛峯寺

(考古)

- 全期 重文 比丘尼法薬埋納経塚遺品関係 平安時代 金剛峯寺

(彫刻)

- 全期 重文 十一面観音立像 平安時代 宝亀院
- 全期 国宝 八大童子立像のうち制多伽童子像 鎌倉時代 金剛峯寺
- 全期 重文 毘沙門天立像(胎内仏) 平安時代 金剛峯寺
- 全期 重文 四天王立像 快慶作 鎌倉時代 金剛峯寺
- 全期 重文 大日如来及両脇侍像 平安時代 金剛峯寺
- 全期 重文 阿弥陀如来坐像 平安時代 金剛峯寺
- 全期 重文 不動明王立像 平安時代 金剛峯寺
- 全期 重文 毘沙門天立像 平安時代 金剛峯寺
- 全期 重文 板彫胎蔵曼荼羅(甲面) 唐代 金剛峯寺

- 前期 重文 大日如来像 鎌倉時代 金剛峯寺
- 全期 重文 如来像(伝薬師如来) 宋時代 金剛峯寺
- 全期 重文 尊勝曼荼羅図 鎌倉時代 宝寿院
- 後期 重文 八宗論大日如来像 鎌倉時代 善集院
- 全期 重文 丹生・高野明神像 鎌倉時代 金剛峯寺
- 全期 重文 紅玻璃阿弥陀像 鎌倉時代 桜池院
- 全期 重文 地藏菩薩像 鎌倉時代 宝寿院
- 全期 重文 弁才天像 鎌倉時代 宝城院
- 後期 重文 弘法大師丹生高野両明神像 鎌倉時代 金剛峯寺
- 後期 重文 五大力菩薩のうち金剛吼菩薩 鎌倉時代 普賢院
- 後期 国宝 五大力菩薩のうち無畏十力吼菩薩 平安時代 有志八幡講
- 後期 重文 阿弥陀浄土曼荼羅図 平安時代 西禅院
- 後期 国宝 阿弥陀聖衆来迎図 平安時代 有志八幡講
- 全期 重文 高野大師行状図画のうち巻第六 鎌倉時代 地藏院
- 全期 国宝 高野山古図写(又統宝簡集六十二) 江戸時代 金剛峯寺

収蔵品の紹介 58

重要文化財

毘沙門天立像 (胎内仏)

木造素地 像高32.9cm

平安時代 金剛峯寺

本像はもと千手院観音堂本尊千手観音の脇侍であったと伝えられる半丈六(約二四〇cm)の不動明王・毘沙門天立像(現在は霊宝館放光閣に展示)のうち、毘沙門天の像内より平成十三く十五年の修理の際に発見されました。

千手院観音堂は蓮意上人(？く一三三二年)が再興し、本尊および両脇侍像も上人により造立されたとき、毘沙門天像の胎内に記された「僧蓮意」「蓮意母尼尊霊」といった墨書銘からこのことが裏付けられました。なお、高さが一丈六尺(約四八〇cm)あったという本尊は現存しません。

仏像を造像する際、その胎内に小像や仏画、経巻、願文などが納入さ



胎内仏 像高32.9cm



毘沙門天立像 像高269.4cm

れる例は少なくありません。このような仏像の胎内に納められた小仏像は一般的に「胎内仏」と呼ばれます。本像は白檀と思われる堅木を用いて製作され、一部に彩色を施し、長年外気にさらされることがなかったため着衣部表面の繊細な截金文様がよく残っています。截金とは、金箔

や銀箔を線状または三角・四角などに細かく切り、貼り付けたものをいいます。平安時代末期の胎内仏の古例として、さらに胎内仏として発見された最古の毘沙門天像とみられることからたいへん貴重であり、平成十七年に重要文化財に指定されました。(F)

栃の木 とち 橡の木 とち

元高野山高校校長 亀岡 弘昭



トチノキの葉と花

高野山では、五月末から六月にかけて栃の木の花が咲き、花は蜜を蜂に提供し蜂の援けにより結実します。

その形状から「天狗の扇」とも呼ばれる大きな掌状葉の気孔から取り入れた二酸化炭素と根から吸い上げられた水をもとに夏の陽光を、たっぷり浴びてつくられる澱粉により果

実が、だんだん大きくなり九月から十月には成熟し果皮が三つに裂けて独楽のような形をした黒褐色の光沢のある種子がでています。

この木はトチノキ科・トチノキ属の和名をトチノキとする樹高が二十メートルにもなる落葉広葉樹です。種子を拾い集めて外皮を剥いで細かく砕き水で晒してあくをぬき地方によって栃餅や栃団子、栃麴などにして食べます。

祖山の山野に自生するものはめっきり減っています。が、「高野三山」の一つ転軸山の近くの「転軸山公園」という施設内には二十株ほどの、この木が植えられ、そのうち花をつけ果実にできるものが年毎に増えています。正智院前の広場の大きなモミの傍に植えられているものも花が咲き種子のできるのが、そう先のことでないと楽しみです。葉は地方によっては食品を包んだり、盛ったりし、材は盆や椀の木地にも。

橡の木・橡はトチノキを指す場合と、ブナ科の大きなドングリを生むクヌギにあてることがありトチノキに本橡の字をあてることがあります。



トチノキの葉と果実

す。

弘法大師の戯曲風の漢文書「三教指帰」巻下・仮名乞児論の中に「橡の飯を食べ、マメ科のクズの繊維で織った粗末な衣を身につけ…」という意味のことが書き遺されています。

一方、高野山の近辺の山間の里には、勸善懲惡伝説によると思われる「こうぼうだいしくわずのくり」というトチノキの方言名も遺っているそうです。

高野山の文化

(一) 巡寺八幡について その三

奥之院維那 日野西 眞定

(五) 三社の託宣を 祀る事例

現在、「三社の託宣」が、どのよう
に祀られてあるかを知り度いと思ひ、
今年（平成十九年）の正月に、次の三
箇所の行事を見学させてもらったので
報告をする。

(1) 高野山大円院、住職は藤田光寛
師

大円院は、現在でも「有志八幡講」
十九箇院の仲間であり、旧行人方寺院
である。その点もあり、伝統を重んじ
て正月棚を祀っている。

今は「土室」（高野山寺院の独特の
囲炉裏）は無くなっているが、それが
有った部屋に、正月棚を祀つてある。
祭神は、中央の三社託宣の軸である。
託宣の文章は、巡寺八幡講本と同じで
ある。ただ神名を「八幡・伊勢・春日」
とあるのを、「八幡大菩薩・天照皇太



大円院の土室の間に祀られた正月棚

神・春日大明神」と書いているのが異
なる。巡寺八幡講系であり行人方の流
を汲んでいる。

向つてその右側に、大黒天、左に如意
宝珠の軸が掛けてある。大黒天は、密
教・修験道系寺院には、多く祀られて

いる。その前の棚に、正面に鏡餅が供
えられる。これは三つ重ねであり、数
としてはあまり他にないが、三軸の三
尊に供える意味があると思える。向か
つて右は、松三寶、左はご馳走の入つた
重箱である。この三つは一月一日に松
三寶の儀式をするためのものである。

三つの軸の向かつて左側に、もと土
室に祀られていた神棚が祀られてあ
る。普通であれば、火の神である荒神
が祀られている。しかし、大円院は非
常に伝統を守つて土室を改造したと思
われる。この点参考になるのは、「親
王院」である。土室には「毘沙門天」
が祀られてある。

正智院蔵史料の中に、大乗院の『年
中雜記』がある。江戸時代には、各院
が、自院の年中行事を、記録にして毎
年の行事を行つていたようである。こ
の『雜記』の中に、土室には毘沙門天
を祀るよう記述してある。そこで、大
円院の大晦日の晩の諸真言の中にも、

毘沙門天が出て来るので、或いはこの
尊が祭られてあるのではないかと気に
なるのである。

参考に、『雜記』に書かれてある大
晦日の晩に行われる行事を紹介する。
「十二月晦日、晝、箸納メノ後、暮六ツ
時（午後六時）ヨリ、土室ニ焚火ヲナ
シ、寺中残ラズ心経誦ス、畢ツテ五



土室で火を焚き般若心経を唱え正月を迎える（親王院）

ツ時(午後八時)ヨリ、松三宝等ノ規式ヲ相イ營ミ候後、門徒ニ出仕候可シ」とある。「門徒ニ出仕」というのは、青巖寺現在の金剛峯寺、江戸時代は学侶方の本山で青巖寺と呼ばれていたから出発する検校一行の壇上鎮守社への奉幣の儀式に出仕しなければならなかった。現在では、竜光院からの奉幣だけとなっているが、江戸時代には、それに引き続いて、検校の奉幣が行われていた。松明五本で、時の検校の法類、さらに学侶方は宝門(宝性院住職を門主とする)と無門(無量寿院住職を門主とする)の二派に分かれ、全員そのどちらかに属していた。従って、その検校の属する派の僧は、全員この行事に参加しなくてはならなかった。



松三宝 (親王院)

現在、土室が完全に残っているのは親王院であり、行事そのものも、これに近い内容で、土室で割木を燃やし、これを僧侶達が囲んで、大晦日の晩からはじまる正月三日間の法要を行っている。大円院のは、これが簡略化されているが、基本は残っていると考えられる。

なお、神棚の下には稻荷の軸が掛けられてある。男神が荷負棒で、前後に稲穂の束を担いだ姿で、この軸も、親王院にも掛けられていたように思う。

さらに、この院独自の歳徳神のお札を軸装して掛けてある。印刷したものを軸装し、土室の間に掛けている。その場所は、その年の「恵方」(正月の神の来る方角)に掛けるのだという。お札の下方に「遍照山大円院」とあり、版木で刷り、信者に配ったものと思われる。「歳徳神」をはじめ、九神の姿と名前が入っており、整備された札である。



稻荷神 (大円院)

この恵方の信仰は、高野山周辺の地区では生きている。座敷に正月棚を祀るが、毎年その置き場の方向を変えている。その理由を聞くと、その年の正月の神さんが来られる恵方に向けて祀っているのだという。その信仰が、大円院にも入っている。

以上であるが、大円院の正月棚は、今は「土室」は無くなっているが、もと「土室」があった部屋を生かして、祀っている。祭神の中でも、「三社の託宣」が主体である。

次に、行事であるが、十二月三十一日の大晦日の晩八時に、祭壇前に、寺の者全員が集まり、御法楽をする。住職が頭をとり、般若心経二十一回を唱える。つづいて諸真言は、天照皇太神・八幡大菩薩・春日大明神・毘沙門



大円院が発行していた歳徳神のお札

天・三宝荒神・年徳神等である。三十分位いで終わる。

一月一日は、本堂のお勤めの後、土室に全員が集合し、午前七時頃から拝む。前の方の檀に祀られてあった、松三宝・お鏡餅・御馳走の入った重箱の三つを、その年の恵方に向かって据え直す。先ず一人一人が順番に松三宝の前に行き、これを拝んで後、そこに供えられている昆布の刻んだものと少量の米を包んだものを戴く。中のものは、後で食べる。お年玉の役をしている。次にお鏡餅、最後に重箱を拝む。その上には、お金の入った蝦蟇口が置かれてあり、福を戴くといひ、これを撫でる。

終わって、部屋に「コの字型」にお膳を並べ、席につき、一同揃って御馳走を戴く。はじめに、僧侶の中堅の者が、「おとそ」を住職以下各人の前に順番に持ち回る。各人は、これを戴く時、大きな声で「新年おめ出とうございます」と一同に挨拶するような気持ちで申してから戴く。終わって御馳走を戴く。



中央・三神、向かって右・柿不動尊、向かって左・光明眞言曼荼羅

(2) かつらぎ町花園地区中南福田儀一家

中南は、旧花園村にあるが、同地区には、丹生高野明神社が存在する。同社は、周辺の中南・久木(旧花園村)、相浦・大滝(高野町)の四小字を、昔は「上の莊」と言ったが、その鎮守社である。つまり、中南は、「上の莊」の中心になる小字だといえる。従って、有力な旧家が存在する。その中の、福田儀一家を調査した。

福田儀一家では、座敷の床の間に、正月棚を祀るが、中央の軸には、八幡大神・天照皇太神(女体神像)・春日大神の三神の姿が描かれてある。向か

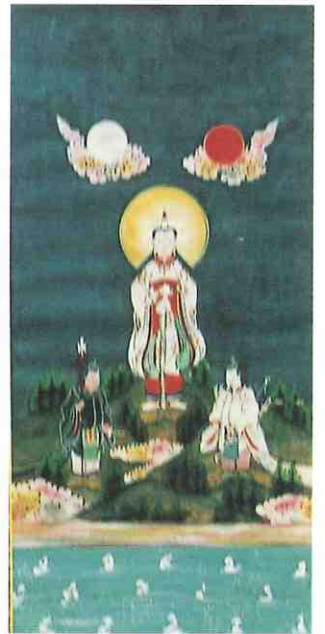
って右は、花園地区築瀬の遍照寺の「柿不動尊」である。この尊は、同寺が有難いお札として、信者に分けてい

る。特に火防(火事の難を防ぐ)の功德が強いと信じられている。

向かって左の光明眞言曼荼羅は、絹地に金泥の梵字で書かれ、「賢順護持」と墨書してある。また軸裏にも「光明曼荼羅 賢順護持」と墨書してある。この「賢順」という僧侶が、同家の先祖に与えてくれたものと、福田儀一氏は語る。軸裏には、「丹波ノ国多紀郡八上新村、儀宮寺ノ法印賢順護持ノ処、是レヲ我ニ授カル者ナリ。依テ、念々護持ノ処歟。賢順法印ノ第二子、賢幢ニ就ク処、当所ニ於テ、故有ツテ、市助ニ当テ授カルノ者ナリ」とある。

この「法印賢順」は、妻帯しており、その第二子賢幢が、中南に来て住したので、修験の僧であったと思われる。市助というのは、福田家の先祖のように思われ、当家の家宝として、保持されている。次の久木地区も、以前には「九鬼」と書いたと言われるが、この「鬼」は修験者を示す。この辺にはこの系統の人達が住していたと考えられる。

福田家には、古い「三神の軸」が残っている。上に日天・月天が描かれ、天照皇太神は、僧形で「雨宝童子」が描かれている。この三神の場合、明治



福田家の古い三神像

時代以前は、全て「雨宝童子」の姿で祀られている。伊勢神宮の奥の院と呼ばれ、納骨信仰「タケ参り」の場として有名な金剛証寺に祀られる「雨宝童子」が信仰の対象になっている。伊勢

信仰の実際の流布には、同寺を中心とする僧侶の力が大きかったと考えられる。

三軸の前に、白木の三宝に、人參・

白菜・ブロッコリ等の精進供が供えられている。高野山の僧が行っていた儀礼が導入されている。

中南 地藏寺

正月に、床の間に、伊勢講の雨宝童子の軸と般若心経を書いた軸の二つが掛けられている。これには、雨宝童子一鉢だけが描かれてある。これらを、一月十五日の伊勢講まで掛けておき、



地藏寺の伊勢講(雨宝童子と般若心経の軸を掛ける)

講を行う。当番は廻り役であるが、講は地藏寺を使う。今では、同寺は地区の会館となっている。

しかし、その時に唱える御真言は、天照皇太神・春日大明神・豊受大明神・氏神大明神（丹生大明神のこと）で、その後は般若心経一巻である。天照皇太神・春日大明神と来たら、八幡大明神と来なくてはならないのに、豊受大明神となっているのは、途中で誤ってしまったものと推察される。御真言から、この軸も、三神であった時代があつたと考えられる。

花は竹筒が使われ、燈明は縁に古式の掛け燈が使われている。かつては室内に掛けられていたものと思われる。いささか風流を感じる。

右傍の般若心経の軸には、昭和戊午年とあるから、昭和五十三年に、政信謹書とあり、新しく追加されたものである。

(3) かつらぎ町久木

久木地区では、一月十五日に伊勢講を行うことになっている。しかし、同地区では、現在他所で生活をしている人も参つて来るので、それに近い土曜日に近頃では行っている。平成十

九年は一月十三日であった。

全体的に、この地区の祭は整然と行われている。場所は、鎮守社丹生・高野明神社の拜殿に床の間が作られてあり、そこに御神体である軸四つが掛けられている。軸そのものが、この床の間に合わせて仕立ててある。向かって左から、伊勢大神宮（祭神白色の衣冠束帯姿）上に二体の日天月天の神体化されたものが描かれてある。次が三社託宣（巡寺八幡講本系）、次、四社明神（高野山内寺院と同じで、作もよい）、次に、伊勢・八幡・春日の三神（伊勢の



久木地区の正月15日の伊勢講に祀られる神仏



神社拜殿での儀式

神は、兩宝童子であり、明治時代以前のもの）である。

この前に、氏子の戸主達が集まる。女性達は、隣の地藏寺（今は左側半分は地区の会館になっている）で、食事の用意をしている。宮守の役（今年は角谷至彦）が、紋付き・袴（水色）姿で、役を勤める。神主と同様に、神前に座し、参詣した氏子達を御幣でお払いをし、備え付けの「神拝ノ詞」を読み上げると、氏子達もその後について唱え、礼拝を繰り返す。

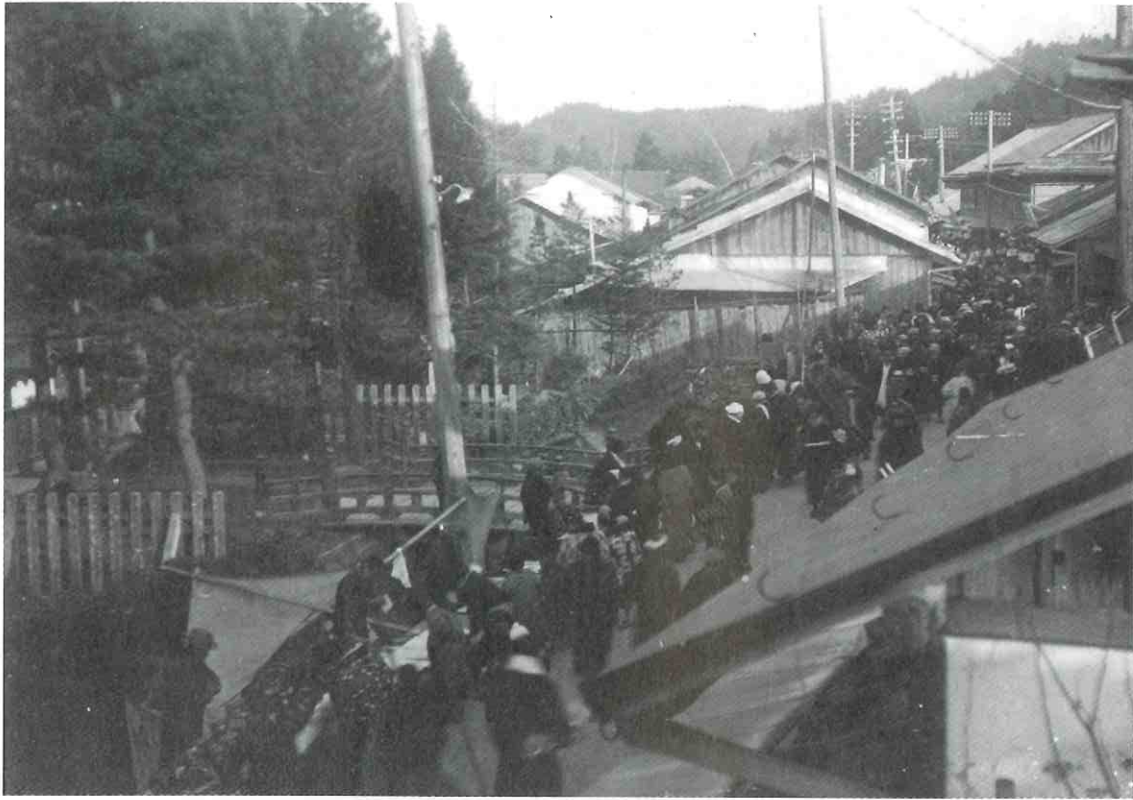
祝詞の後の真言は、南無天照皇大神宮・南無豊受大明神・南無春日大明

神・南無八幡大明神・南無熊野三神（所力）大権現・南無三宝大荒神・南無天野四社大明神・南無氏神四社大明神・南無日本国大小の神儀・南無祈一切総鎮守、以上である。各々二拝・二拍手・一拝がついている。それを宮守の後、丁寧に行っている。

今は、神社の拜殿に、専用の床の間を使い、ここで祀るが、もとは「講家」といい、一年に二回、各家を廻っていた。拝むのも、昭和二十年以前は、般若心経をあげていた。一月十五日のは、正月の祝いも兼ねた伊勢講であるが、伊勢講だけの時は、現在では天照皇大神宮・氏神四社大明神の真言だけとある。この「神拝ノ詞」は、平成四年二月に、宮守朝本校典が作成したとある。現在は、これにより式典を進めている。久木は、もと「九鬼」と書いていた。修験の人々の集落であった。その余韻は今に残っており、整然としたふんいきで行われている。問題の「三社の託宣」も重い存在として祀られている。終って一同、隣の地藏寺に移り、会館で一年中の行事、祭典等の打合せを行い、終わって、女性達によって作られた御馳走を食べ、宴会となる。

一枚の写真から

高野市



昭和2年、旧暦12月21日の高野市風景。

高野市は旧暦で行われていますので、新暦での撮影日は昭和3年（1928）1月13日ということになります。当時の道幅は現在のように広くはなく、昭和9年の弘法大師1100年御遠忌にむけて拡幅されました。その折り道沿いの商店や家屋は、北側の建物については二間、南側は一間ほど、それぞれ後方に下がって建て替えられたそうです。下名迫（ふきや）家所蔵写真より。

高野市とは、都市の名称でも人の名前でもありません。そのむかし高野山で年に一度か二度、定期的に開かれていた市のことをいいます。市とは今でいうフリーマーケットのような形態で、あらかじめ決められた場所に出店するのですが、出店者は市を生業なりわいとしている専門の人たちで成り立っています。こうした出店者たちの間では、高野市のことを「タカマチ」と呼んでいたそうです。タカマチの「マチ」は祭りという意味があるとも解釈されています。

京都の東寺では、現在でも「弘法市（弘法さん）」と呼ばれて毎月二十一日に市が開かれ、なかでも十二月二十一日の「しまい弘法」は特に盛大に行われています。境内のいたる所に露店が出て、その数は千店を越えるともいわれており、そんな市で思わぬ逸品にめぐり逢ったなどという話は普段利用しない者でも興味を引くのに十分で、また、古着や骨董品を見て歩くだけでも実に楽しいものです。一方、今は無き高野山の市はと

いうと、山の生活に直結したものであったといわれています。高野山周辺の山里に在住する人たちは、当面の生活用品を求めて高野市へと足を運びました。旧暦の十二月二十一日早朝、背中に炭を一杯に積んだ女性たちは、山道を歩いて高野へと向かいます。その炭をお金に換えて、高野市で必要な品を求めたり、髪結かみゆいなどへ行ったのだそうです。さらに高野山から遠い在所の人たちは、前日からの泊まりがけとなります。大正三年（一九一四）十二月の高野市では、干し柿やミカン、それに日用品などが売られていて盛大であったことが記録されています。

昭和に入ると、食器、衣類、食料品が並び、ガマの油売りやバナナのたたき売りのような店までが出て、娯楽の少ない時代だったため、こうした物売りの口上くわじょうは珍しくもあり、店先は人だかりとなっていたといえます。その他、綿菓わたがし子やおもちや、本屋、ぜんざい、うどん店など、五、六十軒ほどが出店して、当時の子供たちにとっ



その昔、高野市で賑わった場所で、現在の高室院前付近です。

ては、寒さも忘れるほどワクワクするような一日であったことに違いありません。

市が出ていた場所は、現在の蓮花院前通りから高室院前付近の小田原通りと呼ばれる地区で、当時は、御殿川おとがわの流れが見えていたもので、各店は川を背にしての出店でした。なかでもガマの油売りやへび使いは人気があり、現在、観光協会中央案内所の建っている後方辺りがこうした店の定位置になっていたといえます。その他、小さな店は高野山の商店などから戸板を借りて、それを商品台として商売をしたのだそうです。

高野山に市が立ったのは、いずれも旧暦の十二月二十一日と三月二十一日の年二回であったとされています。このどちらも二十一日という日が選ばれているのは、弘法大師が入定されたのが旧三月二十一日であったためです。この日を縁日として市が催されたことは東寺の弘法市と同じであることがわかります。

ところがこの高野市がいつ頃から始まったのか、未だ明らかではありません。市自体は、山内外の居住者が増えていくに従って自然的に、そして縁日や祭りとしての意味合いも加わって発生したと考えるべきなのかも知れませんが、その始まりを中世以降に求めるのか、あるいは明治以降なのかは意見の分かれるところです。

高野市、とりわけ十二月二十一日の市が旧暦で開かれる理由として、次の二つの事柄が考えられます。一つには、高野市の始まりが明治以前だったため旧暦のまま続けられた可能性です。二つめには、高野山内がいち早く新暦で正月を迎えるようになったのは対照的に、周辺の山里で生活する人たちは、未だ旧暦を守っていたような

のです。往事の高野山について詳しい俳人山陰石楠さん(84歳)に尋ねますと、「高野山の周辺では旧暦で正月を迎えていましたよ」とのこと。つまり旧十二月二十一日の高野市は、山里で生活する人たちにとって、正月を迎えるための準備には欠かせない催しだったことがわかります。

高野市で売られていた品物は多種類に及びますが、戦前頃までは魚類など公然とは売られてはいなかったようです。「昭和の初め頃の高野市では、魚などに限って大滝口の峠に店を出していました」とは、高野山の物産問屋に生まれ育った西本勝美さん(78歳)の話



高野市の日には魚などを売る店があったという大滝口女人堂跡。国道371号線のトンネル(高野隧道)の上になります。

です。昭和初期頃の西本さんの実家は、村里で造られた箸や、杣人まほひとが山中で造った樽や天秤棒てんびんぼう、栗の木の杓子しやくしなどの製品を引き受ける問屋業だったため、山里に住む人たちとの関わりが特に深かったようです。そのため山で生活する人たちにとって、いかに高野市が重要であったかを実際に見てこられたわけです。

魚類を扱う店が出ていたという大滝口とは、高野山の南方にあり、高野七口の一つ大滝口女人堂跡のことです。大滝口からはそれぞれ村里への帰り道にもあたりますので、塩鯖しほさばなどをぶら下げて帰っていった人も多かったようです。時に帰りが遅くなり、道に迷ったかのようにグルグルと同じ山道を歩き回り、ついには朝方になって気が付けば、ぶら下げていたはずの塩鯖が別のモノにすり替わっていた、などという話は枚挙にいとまがありません。

こうした時の魚屋は時代とともに消えましたが、高野市は、昭和三十年(一九五五)頃まで続いたということでした。(M)

執筆に際しては、「高野市」西本勝美著、「高野市」近藤喜博著、「高野市」辻本青塔著、「高野山」毎日新聞社、「わたしたちの高野町」高野町教育委員会、「高野山時報」などを参考にしました。

大滝

小さいながら迫力のある滝

弁天岳を水源とする御殿川は高野山内を西から東へと流れ、大滝地区を過ぎると一ノ枝川と合流し、有田川と名前を変えて紀伊水道へと注ぎます。

古来、御殿川には、大滝に至るまでの間に四十八の滝があるとされておられ、その最後にして最大、一番美しい滝が大滝です。

大滝の落差は十メートルにも満



四季を通して美しい景観を見せる大滝。春から夏はヘビが多いので気をつけましょう。



水の飛距離が特徴です。

たないものです。しかし滝の上がちょうど鉢のようになっていて水の落ちる口は一点に集中し、しかも滝の上方で岩が一段せり出していることで水の飛距離が伸び、小さいながら迫力のある滝となっています。

伝承によると、滝の中程岩面に水漣の不動、あるいは清不動とも呼ばれる不動尊が刻まれているといわれています。御殿川に汚れた水が流れ込んだとしても、不動明王の霊力で大滝より下流は清い水になるのだとか。また、滝壺には龍が住んでいるともいわれ、干ばつに際しては高野山のお坊さん達がこの滝で雨乞いの祈禱をおこなったということです。大滝の名称は、地区名である大

滝(村)の由来ともなっていて、熊野参詣道の小辺路の拠点にあたりますが、現在では自動車で簡単に行くことができます。先日、この大滝に不動尊が祀られているかどうかを調べに行ってみました。しかし、いくら目をこらしてもそれらしい像を見つけることができません。ひよっとすると崩れて滝壺の中に落ちていたので、はとのぞき込みますが、滝の飛沫と水の落ちる量はすさまじく、とても水の中までは見えません。さらに近づけば、滝壺周辺には滝特有の湿気を含んだ風が吹いていて、なんだか畏れおおくなって、早々の退散となりました。

お知らせ

連載「高野山の名鐘」は、紙面の都合で休ませていただきました。

拝観時間の変更と利用案内

開館時間(平成18年度から次記のとおり変更されました)

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～16時30分

休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

専用駐車場あり

高野山の文化財を代表する宝物群が約二百八十六日ぶりに帰山しました。これは北海道の旭川と札幌で行われた全期間八十五日にわたる「空海マンダラ」展に出品されたためです。

旭川展の終了後、次の札幌展までは二百日ほど期間が空きましたので、展示品はそのまま北海道で管理されました。これほど長期にわたって高野山の主要な文化財が高野山以外の地で保管されたのはおそらく初めてのことだと思います。

たくさん宝物を預かる側、託す側の、特に担当者の方には計り知れないものがあります。

文化財はモノをいけません。北海道での長期滞在、そして長旅を終えればし休息の後、霊宝館大宝蔵展での出陣となります。

紫雲放光